

主な出展リスト

『東勇作と薄井憲二』

- ◆ 集合写真／写真左上より時計回りに、内田道生・鈴木滝夫・東勇作・薄井憲二／日本／1940年代 (AYM-05)
- ◆ 薄井憲二から恩師・東勇作への葉書／日本／1945年 (AYM-06)
- ◆ 写真 (サイン入り)／東勇作・益田隆／『礼猫』／日本／1934年 (AYM-07ws)
- ◆ 写真 (サイン入り)／益田トリオ (東勇作・梅園滝子・益田隆)／日本／1934年 (AYM-08ws)
- ◆ 写真 (サイン入り)／セルジュ・リファール (PH-D-145-08ws)
- ◆ 書籍 (サイン入り)／蘆原英了／『古典舞踊の基礎』／日新書院／1942年 (BK-2880-tec-ws)

『牧神の午後』

- ◆ ポスター／薄井憲二出演「東勇作バレエ40周年公演」／日本：虎ノ門ホール／1967年1月31日 (AYM-13)
- ◆ 絵画／『牧神の午後』／作：東勇作／日本／1950年代 (AYM10-01)
- ◆ 絵画／『牧神の午後』／作：東勇作／日本／1950年代 (AYM10-02)
- ◆ レリーフ／『牧神の午後』／作：東勇作／日本／1950年代 (AYM10-06)
- ◆ 限定書籍／『牧神の午後』／ジョルジュ・バルビエ版画集「ニジンスキー」／フランス／1913年 (AB-05)
- ◆ プログラム／バレエ・リュス公式プログラム／表紙：レオン・バクスト画「牧神の午後」／薄紙：レオン・バクスト画「青神」／フランス：パリ：シャトレ座／1912年 (PRBROF-03)
- ◆ スクラップブック／『牧神の午後』記事／『ザ・スケッチ』誌／イギリス／1912年6月26日 (SB-08-14-17ws)

『薔薇の精』

- ◆ 絵画／『薔薇の精』／作：東勇作／日本／1950年代 (AYM10-04)
- ◆ 限定書籍／『薔薇の精』／ジョルジュ・バルビエ版画集「ニジンスキー」／フランス／1913年 (AB-05)
- ◆ 限定書籍／タマラ・カルサヴィナ／『薔薇の精』／E. O. ホッペ写真集／イギリス／1913年 (AB-20)
- ◆ 限定書籍／ワツラフ・ニジンスキー／『薔薇の精』／E. O. ホッペ写真集／イギリス／1913年 (AB-20)

主な参考文献・資料

- ◆ 東勇作同門会：編／『牧神：或いは東勇作：生誕100周年記念誌』／東勇作同門会／2010
- ◆ 鈴木晶／『薄井憲二 (1924～2017) シベリア抑留に見たバレエ映画が始まり』／長塚英雄：責任編集／『ドラマチック・ロシア in Japan：続々・日露異色の群像30：文化・相互理解に尽きた人々』／生活ジャーナル／2019 / 401～413頁
- ◆ 栗原俊雄／『創作の原点 戦後70年：日本バレエ協会会長・薄井憲二さん (上)』／毎日新聞／2015年3月16日夕刊
- ◆ 斉藤希史子／『創作の原点 戦後70年：日本バレエ協会会長・薄井憲二さん (下)』／毎日新聞／2015年3月23日夕刊
- ◆ 薄井憲二／『ロシアバレエと回る縁』／日本経済新聞／2016年4月12日刊
- ◆ 参考映像／『東勇作と牧神の午後』／仙台：ことりTV／2015年9月／<http://cat-vnet.tv/movie/kotori/201509.html>



Kenji Usui Ballet Collection

薄井憲二 バレエ・コレクション
2020 企画展

東勇作 (1910～1971) と薄井憲二 (1924～2017)
～『牧神の午後』と『薔薇の精』を中心に～

2020/7/29 (Wed.)～2020/9/6 (Sun.)

Kenji Usui Ballet Collection

Yusaku Azuma & Kenji Usui

2020/7/29 (Wed.)～2020/9/6 (Sun.)

(休館日はwebでご確認ください)

◎ 企画・監修

関典子 (せき・のりこ)／薄井憲二バレエ・コレクション・キュレーター

Noriko Seki (Curator of Kenji Usui Ballet Collection)

舞踊家・振付家・舞踊研究者。幼少よりクラシックバレエを学び、18歳でコンテンポラリーダンスに転向。お茶の水女子大学大学院博士後期課程を経て、現在、神戸大学大学院人間発達環境学研究所准教授。日本ダンス評論賞・兵庫県芸術奨励賞・神戸市文化奨励賞等受賞。

若林絵美 (わかばやし・えみ)／薄井憲二バレエ・コレクション・アシスタントキュレーター

Emi Wakabayashi (Assistant Curator of Kenji Usui Ballet Collection)

後藤俊星 (ごとう・しゅんせい)／薄井憲二バレエ・コレクション・アシスタントキュレーター

Shunsei Goto (Assistant Curator of Kenji Usui Ballet Collection)

兵庫県立芸術文化センター 薄井憲二 バレエ・コレクション 担当

〒663-8204 兵庫県西宮市高松町 2-22 tel: 0798-68-0223 (代表) fax: 0798-68-0212

Hyogo Performing Arts Center

薄井憲二(1924~2017)と東勇作(1910~1971)

- 1936年——当時12歳だった薄井少年は、レコード店で偶然、イーゴリ・ストラヴィンスキー作曲「火の鳥」を聴き、衝撃を受け、バレエ・リュスの存在を知る。
- 1941年——薄井は、バレエ・リュス作品『牧神の午後』『薔薇の精』公演の新聞広告を見つける。しかし、学校の期末試験が控えていたために観ることはできなかった。
- 1942年——同バレエ団の公演を観ることが叶う。それが、東勇作バレエ団だった。東主催のバレエ研究会に参加した薄井は、「バレエは自分でやってみなければならない」と、週3日レッスンに通うようになる。
- 1943年——薄井、初舞台を踏む。
- 1944年——東、召集される。翌年、東京大学経済学部生だった薄井も徴兵され、満州へ。
- 1949年——薄井、シベリア抑留から帰国。ただちに復学し、東勇作バレエ団に再入団、翌年に舞台復帰。
- 1967年1月31日——「東勇作舞踊40周年記念公演」。当時56歳の東は『牧神の午後』を見事に演じた。本公演には薄井も出演した。

東勇作(1910~1971) — 薄井憲二

東勇作は、バレエ舞踊家を目指して仙台から上京した。バレエ芸術の殆ど存在しない当時の日本にあって、伝手を求めて習練に励み、英仏語による資料に学び、自らのバレエを確立し1941年バレエ団を設立した。西欧の作品を自分流の解釈で上演し成功したが、東の真骨頂は、習得したバレエの土台に、自らの舞踊性をのせた、自分のための独舞であった。その芸術性、獨創性、高度な技術は、東自身以外誰れにも伝え得ず、残念ながら消滅した。



左上より時計回りに、内田道生・鈴木滝夫・東勇作・薄井憲二(1940年代)

東勇作『牧神の午後』— 薄井憲二

東の『牧神の午後』は周到なりサーチの末に振付けられ、出来得る限りニジンスキーの原作に近づけるべき意気込みが見られたが、のちのセルジュ・リファール版に影響されたところもあった。(中略)原作のアイディア通りに、ギリシャの壺絵(かめえ)に似せて身体の側面のみをみせ、ニンフ達も殆ど正面には向かない。古典舞踊の技法からは離れているものの、動きの流れは東の創作力、舞踊性をよく語っており抒情的であった。後年にニジンスキーの原作を見て、ニジンスキーが古典舞踊からの脱却、乖離にのみ固執している傾向があると知ったが、東のそれは、もっと自由に、もっと自然に出来ていると思った。ニジンスキーの執念には、ところどころ胸を衝かれるところがあるが、東の『牧神』は、どこを切り取っても美しかった。(中略)最後の華やかな公演は1967年1月31日 虎ノ門ホールで開催された「東勇作舞踊40周年記念公演」であった。(中略)観る人は、東の肉体に少しも衰えがないのに驚嘆した。上半身裸のこの作品では、肉体の美しさが重要である。東はこのとき57歳に近い。格別に鍛錬の跡んだ様子はないから、これも天与のものだったのだ。若ししたらこのときの『牧神の午後』を東勇作の白鳥の歌とすべきかもしれない。



『牧神の午後』 (L'Après-midi d'un Faune)

- [振付] ワツラフ・ニジンスキー
- [音楽] クロード・ドビュッシー『牧神の午後への前奏曲』(1894)
- [美術] レオン・バクスト
- [初演] 1912年5月19日 パリ: シャトレ座

夏の昼下がりが、水浴びに来たニンフが落としたヴェールを密かに持ち帰った牧神は、その上に横たわって官能的な夢に耽る。ニジンスキーが初めて振り付けた作品で、自ら牧神を演じた。獸的なエロティシズム、ギリシャの壺絵をモチーフにした二次元的な振付(内股で手足を角張らせ、横顔のみを観客に向けた)、終盤の露骨な自慰行為の再現といった斬新な表現はスキャンダルを巻き起こしたが、彫刻家オーギュスト・ロダンは、深い感銘を受け支持した。

「かのニンフたち、永遠の命を生きよ……かくも晴れやかに、その軽やかな肉体は、眠気を誘う空気の中を漂よ……私は夢に耽っていたのか?……」

(ステファヌ・マラルメの詩の一節より)

東勇作『薔薇の精』— 薄井憲二

東勇作はまた『薔薇の精』が好評だった。跳躍力があったから圧倒的な効果を挙げた。踊りは勿論創作だが、原作と違うところが二ヶ所あった。ひとつは少女(松山樹子)が椅子から起き上がると、最後の目醒めの直前にもう一度座るまで、ずっと椅子には戻らないことである。パリ・オペラ座とバレエ・リュス・ド・モンテカルロで何度もこれを見ていた蘆原英了は、少女は踊りの途中でもう一度椅子に戻ることを東に教えた。しかし東は、音楽の流れの中で、どこにもう一度座るところがあるのか考えられないといってその助言は無視した。もうひとつは、「薔薇の精」が上手の窓から入ってきて、また同じ窓から出ていってしまうことである。原作は中央より少し下手寄りの大きなフランス窓から出ていくのである。フランス窓というのは、殆ど床まで届く、両開きの窓をいう。このバレエは、ニジンスキーの驚異的な跳躍、殊に最後のひっこみが眼目だったから、フランス窓にして跳び込み易くしたのだろう。記録や解説では「薔薇の精」は窓から跳び込んできて、窓から跳び去って行くところから、東が窓をひとつにしたのは当然だろう。



『薔薇の精』 (Le Spectre de la rose)

- [振付] ミハイル・フォーキン
- [音楽] カール・マリア・フォン・ウェーバー『舞踏への勧誘』(1819)
- [美術] レオン・バクスト
- [初演] 1911年4月19日 モンテカルロ歌劇場

舞踏会からうっとり帰宅した少女が、身につけていた薔薇の花を手に、うたた寝をする。すると窓から、薔薇の精が現れ、半分眠ったままの少女の手を取って踊る。終盤、薔薇の精は驚くべき跳躍で窓から飛び去り、目覚めた少女は夢の余韻に浸る。「少女」役のタマラ・カルサヴィナの優しく抒情的な表現力、「薔薇の精」役のワツラフ・ニジンスキーの妖しく人間離れた存在感。当代随一のスターダンサーたちの魅力をいかんなく發揮した名作。

「……あなたのまぶたを開けてください。
私は昨夜の舞踏会で、あなたが胸に着けてくださった、あの薔薇の精です……」

(テオフィル・ゴティエの詩の一節より)

